



◀音戯の郷入り口にある売店では、無料でお茶しるこを振る舞った。このしるこは色が白く、ぱっと見は甘酒にも見える。ちょっとほかでは見たことがない珍しい印象。白あんベースにお茶が入っているという。口にした来場者は「とてもおいしい。白あんの味が利いている」「ほかでは見たことがない。甘くていい感じ」と、感想を話していた。



1



4



3



5



6

4力強い赤石太鼓の演奏が会場全体にこだまし、新茶シーズンを盛り上げた5音戯の郷館内には、フレーバーティーの試飲ブースが登場。4種類の香りがあり、どの来場者も一瞬どれにするか迷う。全種類試飲する人も6ベンチで休憩しながらステージを見つめる。その笑顔が楽しさを物語る

▶大道芸人が作ってくれたバルーンアート
の刀を、大喜びで振り回す男の子



2

1つきたてのお茶餅を手にする来場者。子どもにもお母さんにも大人気2闘茶会に挑戦中。大人顔負けの表情でお茶を試飲する子ども3手揉み保存会による新茶の手揉みブース。来場者に丁寧に手ほどきする保存会会員

初摘みされたもの。その日のうちに下準備を施し、一晩寝かせてありました。手揉みは午前9時過ぎから数時間にわたって続けられました。

午前11時に始まったイベントのオープニングセレモニーでは、来賓の板谷信町議会議長が「この町の特産品である川根茶、そして観光とを結び

つけ、外に向かって情報を発信していくことは、この町の将来にとって大切な取り組みです。今後も、本町の魅力をより多くの人に知ってもらうため、積極的に行動しましょう」と祝辞を贈りました。

会場脇では川根高校の生徒によるブラスバンド演奏がイ

ベントに花を添えます。さまざまな楽器が織りなすハーモニーに、来場者から大きな拍手が送られました。

会場に並ぶ川根茶に関連する各ブースでは、次第に呼び込みが始まりました。

茶業組合のおかみさんたちで組織する「サークル茶の葉」ブースには、川根茶を使ったアイデア料理が並び、来場者に無料で振る舞われました。

素朴な味わいのさまざまな手作り料理。大人から子どもまで手が伸びています。そして、料理の脇にはレシピが添えられていました。これは、来場者が家に帰ってから川根茶料理を作り、味わって欲しいというサークル茶の葉の願いを形にしたもの。町外から訪れた女性は「茶がらがこんな風に生まれ変わるなんてびっくり。ぜひ家でも試したい」と、レシピを手にしました。

その横では手揉み保存会による新茶の手揉みが続いています。力を込めてお茶を揉む姿に来場者も興味津々。会員の手ほどきを受けながら、手揉みに熱中する来場者の姿も見られました。次ページへ



川根お茶街道推進協議会

川根茶の日イベント

平成23年4月17日

和を醸す

かも



ここにも、一つの物語。
広報かわねほんちょう

新茶シーズン到来を告げる「川根茶の日」
川根茶の魅力を通して人々が触れ合う場

新茶シーズンの到来
「七十七夜」の記念日

川根茶の魅力を「より多くの人に実感してもらおう」と、川根お茶街道推進協議会※では平成18年、4月21日を「川根茶の日」と制定しました。お茶にちなんだ日と言え、十八夜がおなじみですが、茶農家の繁忙期と重なるため、七十七夜目（4月21日）としたもの。協議会では毎年、記念日直近の日曜日に「川根茶の日イベント」を開催し、新茶シーズン到来を町内外に広く発信。茶業振興や観光客誘致などを図っています。

今年は4月17日、奥大井音戯の郷を会場に、さまざまなイベントを繰り広げました。同日大井川鐵道では、イベントを記念したSL列車を運行。車両一両を貸し切り、イベント参加者80人を乗せて新金谷駅を出発。車内では茶娘にふんした女性が、川根茶を振る舞ったり、クイズを出題したりしながら、終点千頭駅へと向かいました。

音戯の郷では、午前8時半頃から会場準備が始まり、その一角では、手揉み保存会会員による新茶の手揉みが始まりました。この新茶は、16日に農林業センター（地名）で

川根お茶街道推進協議会…川根茶産地の茶業関係者、行政、商工会、観光協会などで構成する川根茶の魅力を広くPRするための組織。